



仏教マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ〈248〉



檻
の中
の
猛
獣



「へ知ってる？ 仏事のあれこれ」

「お彼岸」ってなあに？



～仏教に遇う季節行事～

泉大津市 南溟寺 戸次 公正

この国では、春と秋の二季に仏教全体に通じる「彼岸会」という行事を営んでいます。

春には、「春分の日」を中心にして七日間にわたり仏事としての法要で聞法の座がお勤めされます。春は桜を待つ、別れと出会いの時節です。

秋には、「秋分の日」を中心に一週間にわたり催されます。それは彼岸花・曼珠沙華で秋の気配を感じさせてくれます。

その季節の只中で、先

立っていった人たちを憶念する場では、「おだんご」や「おはぎ」を頂きます。

「彼岸」という語は、「此岸」（迷いの世界であるこちらの岸）ではない「彼岸（彼方の岸）」という意味で、そのインド語は「パーラミタ」（漢訳「波羅蜜」といい、「覚りのくに」への行を指します）。

それは、「六波羅蜜」といい、「布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧」の「六度の行」です。

その行は、『無量寿経』で、法蔵菩薩が阿弥陀仏に成るための果てしない「行」として修行された道です。その行が成就して「南無阿弥陀仏」という名号になりました。

「彼岸会」は、聖徳太子の頃に始まったといわれています。やがて平安時代には朝廷で、そして江戸時代には年中行事になりました。

聖徳太子が建てた大阪の四天王寺には、西門に「当極楽土東門中心」の文字が掲げられています。

そのいわれは、『観無量寿経』に説く、西方浄土への「観法」（十六観）で、「日没の方向に極楽を想定して願う教え」にあります。

また、中国・善導の著した『観経疏』には、「太

陽が真東から出て、真西に没する春分、秋分の日

にこの日想観を修して、その日没の処を極楽浄土と知って敬慕の念を起すべき」と述べています。

そこには、「此岸」と「極楽の彼岸」に道を歩む、「二河白道」の譬喩が説かれています。

親鸞は、『教行信証』の「信巻」（『真宗聖典』第二版二四七～二五〇）にその物語を「教え」として述べています。

私は子どもの頃、この「二河白道」が描かれた掛け軸を床の間で観たことがあります。

彼岸会は、日本にのみ行われる行事で、何故かインドや中国、西域、朝鮮などのアジアにはないものです。

今月のことば

三塗苦難ながくとじ

但有自然快樂音

このゆえ安楽となづけたり
無極尊を帰命せよ

しています。

時と場合によつては、場や周囲から求められることを察知して、そこに自身を合わせることもあるでしょう。また、本心を隠しながら、周りの雰囲気や優先して、物事を円滑に進めていくための発言や振る舞いをしなければならぬこともあるでしょう。

人間として、いのちあるものを生きる私たちは、家族、学校、職場といった集団生活を過ごすなかで、その役割や義務に対して一人ひとりが応えていくように求められます。

そして、それぞれが与えられた役割や義務を全うするために、自身の発言や振る舞いに気をつかいながら、社会の仕組みや規則、価値観に適應していくように、周囲との調整をはかりながら生活

つくりだしてしまうのではないのでしょうか。

「失敗したらどうしよう」「周囲の人に迷惑をかけたらどうしよう」と思い、「失敗したら迷惑をかける」「迷惑をかけたら嫌われる」と思い詰め、「だから失敗はできない」と考えてしまうのです。

上手くできることよりも、上手くできないことの方がはるかに多いと思うのですが、失敗を恐れるあまり「こうあるべきだ」「こうでなければならぬ」と、知らないうちに自身を追い込んでしまふのです。

そういう考えが心と身体を制約して、目に見えない鎖のようなもので自分自身を縛ってしまうのかもしれない。

そんな時は、一度立ち

止まって、ゆっくり深呼吸して周囲の音を聞いてみましょう。四方八方から聞こえてくる音は、一人ひとりの声がさえぎられることなく、否定されることもなく、批判しあうこともない、ただ自然の音が周囲と調和して、身体に響きわたる心に染みわたるような心地よさを与えてくれます。

いのちの響きあう音をとおして、そっとそばで安心を与えてくれる存在や力に気づかされた時、手を合わせずにはおれないのです。

(三村 翔子)

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』(初版) 482頁

(第二版) 577頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

(青本) 125頁

自分も尊い

けれども、

隣の人も

尊い

海 法龍

『2026年難波別院カレンダー』3月のことば



掲示板のことば

随分昔のことですが、お寺で行事が行われた際、その場に居合わせた小さな子どもたちを、あるご門徒のおじいさんが、話しかけるでもなく、ただただ遠くから優しい目で見守っておられました。

たったそれだけのよくある光景です。しかし、丁寧な人柄も相俟ってか、そのご門徒の眼差しが、子どもたちの存在を無条件に受け入れておられるように感じられ、強く印象に残りました。

そして、なぜかそのことが「尊い」という言葉に思い出されてくるのです。

「私たちがすでに受け入れられていた。それが私たちの誕生だったの

ではないでしょうか。私一人は受け取られていた。私一人はすでに救われてあった、というのが人間の一番基本にあるのではないのでしょうか。」

これは児童養護施設・暁学園の施設長をされておられた祖父江文宏さんのお言葉です。ご門徒の優しい眼差しが思い出されるとき、いつもこの言葉が思い浮かびます。

そこに、他者も自分も条件付きでしか受け止めることができない私に対し、「我々が今生きてある根っこには、お互いに無条件で受け止められている」ということがあるんだ。その根っこを尋ねるところに、我々の尊さが見出されてくるんだ。」というメッセージが向けられているように感じます。

（大阪教区教化センター）